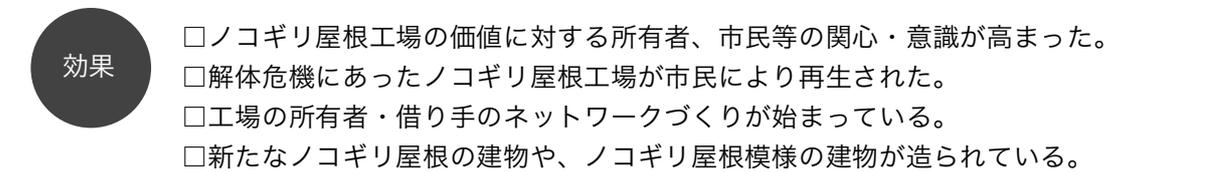
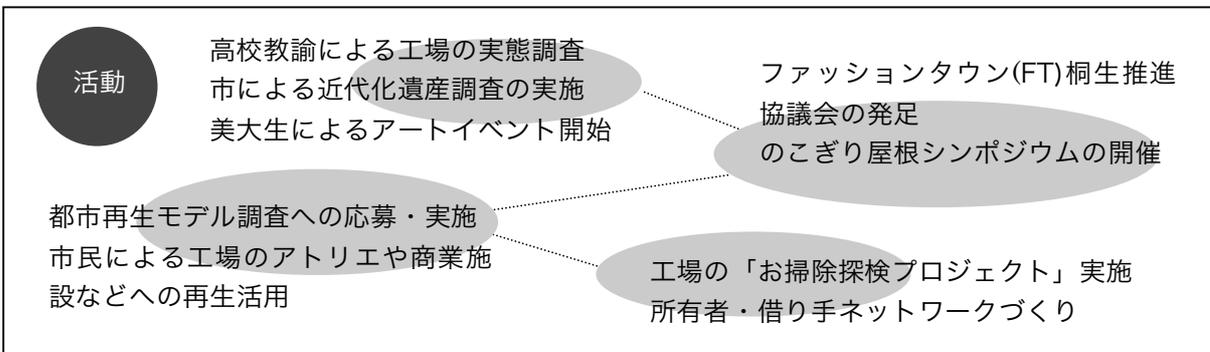
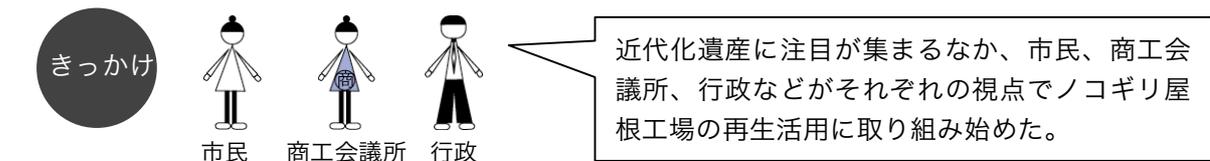
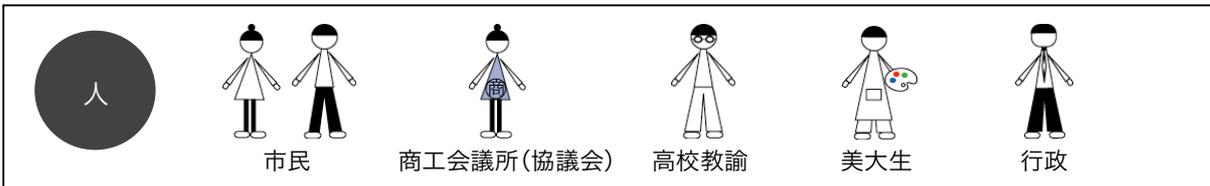




桐生には、ノコギリ型の屋根が印象的な工場が町中に建ち並んでいます。しかし、市民にとっては当たり前の風景であるが故に、使われなくなった工場は次々と壊されていきました。

そんなとき、まちの活性化を模索するなかで、市民、商工会議所、行政がそれぞれの視点からノコギリ屋根工場の価値に気付き始め、再生活用に乗り出します。

ノコギリ屋根工場は、織物だけでなく、アートや食料品など、さまざまなものづくりの場として新たに活躍を始めています。

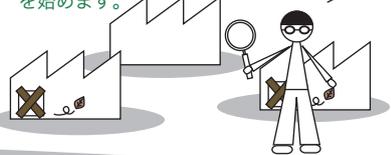


高校教諭・市民	美術大学生	商工会議所・FT 推進協議	行政
<ul style="list-style-type: none"> ○ノコギリ屋根工場の実態調査(教諭) ○ノコギリ屋根工場のアトリエ等への再生活用(市民) ○アートイベントへの協力(市民) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ノコギリ屋根工場などを会場としたアートイベントの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○シンポジウムの開催 ○都市再生も出る調査への応募・調査 ○所有者・借り手のネットワークづくり ○お掃除探検プロジェクトの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ○市内の近代化遺産調査の実施 ○ノコギリ屋根工場の国登録有形文化財への登録

1983

地元の高校教諭が市内のノコギリ屋根工場の実態調査を始めます。

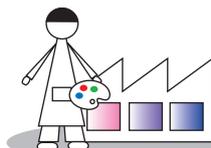
ノコギリ屋根工場の実態解明だ



1984

今あるものを活かす…!

町づくりフォーラム



東京の美術大学生が桐生のまち並みや建物を舞台に、制作活動を行っています。ノコギリ屋根工場も会場となり、多くの作品が生まれています。

まちを元気にしたい

ファッションタウン構想



地域の産業”ものづくり”と”まちづくり”が一体となって、地域の活性化を図ろうと考えます。

県の近代化遺産調査を受けて、市でも独自の調査を行い、その結果、多くの近代化遺産が確認され、「近代化遺産拠点都市」を宣言します。



近代化遺産と歴史的まち並みを活かしたまちづくりについて、行政と市民で討議が行われました。

空き工場をアトリエに

アトリエ



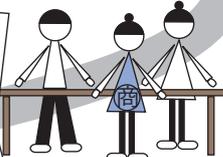
フォーラムでの講演に刺激を受けた所有者の1人が、工場をアトリエに再生させました。

1987

ノコギリ屋根特徴かな

桐生の資源何だろう

ファッションタウン推進協議会



推進協議会において、地域資源の掘り起こしを行い、その中でノコギリ屋根工場が浮かび上がってきました。

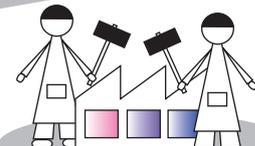
ノコギリ屋根工場関心高いな



まちのすてきな風景を市民が推薦する取り組みが始まります。ここでもノコギリ屋根工場が多く取り上げられます。

これを一つの軸に!

ノコギリ屋根工場再生活用



美大生たちは拠点としていたノコギリ屋根工場を自分たちの手で改装し、蘇らせます。

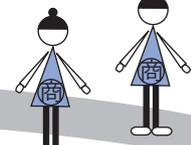
意見交換を

シンポジウム
のこぎり屋根のあるまち



まちづくりの先駆者である向島と西陣の人たちを招いて、シンポジウムを開催しました。

所有者同士をネットワークつくる



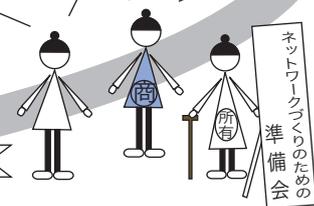
シンポジウムでの話を受けて、工場の所有者のネットワークづくりに動き始めます。

美容院

市民の手で、美容院に再生されました。

なかなか所有者集まらない

みんなどう考えているのかな



資源としての可能性は?

活用事例は?



工場の可能性や役割、活用事例も調査されました。

モデル調査には、地元の高校生も協力しています。

この事業に応募しよう

全件調査だ



国が実施する「都市再生モデル調査」に応募し、採択されました。

博物館

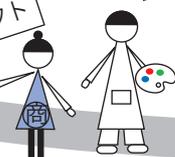
市民により、博物館に再生されました。

残したい人多いよ

2007

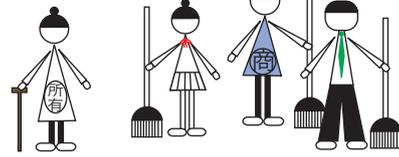
工場の掃除しながら交流のきっかけに

お掃除探検プロジェクト



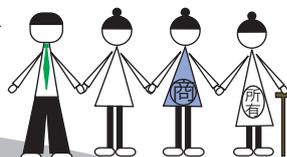
この工場も悪くないかも…

中に入ったの初めてだ



荒れていた工場がきれいになることで、所有者の気持ちにも変化が生まれてきました。

それぞれできること、連携することも必要だね



残したい所有者は多いのに、ネットワークづくりは進まない…。それならまず、所有者とのつながりをつくらせよう、工場の掃除をみんなでやるイベントを実施します。

市民の手で、ベーカリーに生まれ変わりました。

ベーカリー

□ 景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント □

原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

● 地域の発展を支えてきたノコギリ屋根工場に着目したまちづくり

- ・ ノコギリ屋根工場は、明治から昭和にかけて、桐生で営まれてきた繊維産業の工場として建てられ、桐生の近代化と発展を象徴するものです。200棟以上が現存し、その数は日本一ともいわれています。屋根がノコギリの歯に似た形をしていて、屋根の傾斜面（主に北側部分）から採光することで、一定の光を工場内に取り込むことができる造りになっています。
- ・ しかし、桐生に住む人にとっては、ノコギリ屋根工場はごく当たり前の風景で、それが特徴ある風景だという認識は、当初は非常に薄いものでした。
- ・ そんななか、桐生のまちづくりを考える過程で、ノコギリ屋根工場が地域資源として注目を浴び始め、現在ではまちづくりの一つの核となっています。

>> 見慣れたまちの景観のなかにある魅力や価値には気づきにくい面があります。そのような場合には、まちの歴史文化を見直し、特徴や個性を明らかにすることで、そこにあるものの価値を再認識することができます。



桐生市内のノコギリ屋根工場



屋根の採光窓

● アートイベント「桐生再演」を通じたノコギリ屋根工場の価値の再発見

- ・ 「桐生再演」は、平成6年から、東京の美術大学の学生や卒業生を中心に、桐生市内の住宅や工場、川辺などを会場として行っているアートイベントです。学生自らが作品づくりを行う場所を、まちを歩いて探すのですが、ノコギリ屋根工場が度々会場として取り上げられ、そこからさまざまな作品が生み出されています。
- ・ 会場として使われた際には、学生らによって掃除やメンテナンスが行われたり、作品の展示のためにこれまでと異なる使い方をされたりして、所有者に対しても工場の持つ新たな側面に気付かせてくれる機会となっています。

>> 外の人から地域の良さ、まちなかにあるさまざまなものの価値を評価してもらうことで、なかからは気づきにくいまちの魅力を発見できます。

>> アートイベントという、日常とは隔たったものを通して地域資源を見ることで、いつもとは異なった空間、モノとして捉えることができ、新たな価値に気づきやすくなることも考えられます。

原則2《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●ファッションタウン桐生推進協議会における地域資源の掘り起こし

- ・ 桐生市の商工会議所では、平成5年にファッションタウン構想を策定し、その推進母体となるファッションタウン桐生推進協議会を、産業界・教育機関・市民などの参加のもと、立ち上げます。
- ・ そして、推進協議会のなかで地域資源の掘り起こしを行い、そこで浮かび上がってきたのがノコギリ屋根工場でした。
- ・ これには、桐生市による近代化遺産の調査、商工会議所による「わがまち風景賞」の実施、フォーラムの開催などが背景にあり、これ以降、ノコギリ屋根工場の再生活用を大きな軸として活動が行われていきます。

>>しっかりと地域資源の掘り起こしに取り組むことで、自分たちのまちにはどんなものがあり、それをどのような位置づけとするのかを明確にすることができます。そしてそれにより、景観まちづくりの軸に何を据えていくのかを明らかにすることができます。

●広く市民に周知するための講演イベントの開催

- ・ 平成4年に桐生市により「桐生の町づくりフォーラム」、平成12年に推進協議会により「町づくりセミナー」、平成14年には商工会議所と推進協議会によりシンポジウム「のこぎり屋根のあるまち・桐生からの発信」が開催され、多くの市民の参加を得ています。
- ・ 講演をきっかけに、ノコギリ屋根工場の所有者が再生活用に取り組み始めたり、推進協議会では全件調査に乗り出したりと、イベントの開催が新たな動きを誘発する、いいきっかけになっています。

>>シンポジウム等を開催することで、より多くの人に一度に活動内容を伝えることができます。活動に携わっている人には、取り組みを振り返る機会となり、それ以外の人には、活動を知ってもらう機会となります。

●ノコギリ屋根工場の所有者のネットワークづくり

- ・ 商工会議所と推進協議会の主催で行ったシンポジウムを通じて、所有者のネットワークや借り手の情報共有するための連携組織をつくらうという動きが始まりました。
- ・ 建物を再生活用しようとするとき、行政が建物を借り上げて、利用したい人に貸し出すという方法も考えられます。しかし、ノコギリ屋根工場はすべて個人所有であり、数も多く、広く活用しているとするときには、個別に対応していくよりも、ネットワーク組織を介した方が取り組みやすく、また、情報の共有も容易に行えます。
- ・ 推進協議会を中心に、連携組織立ち上げのための準備会や所有者との交流を深めるためにイベントなど、ネットワークをつくるための活動が進められています。

>>地域資源の活用を行っていく際には、所有者同士や借り手、あるいは専門家、行政などの間にネットワークがあると円滑に進むことが期待できます。

●都市再生モデル調査への応募・調査によるノコギリ屋根工場の実態把握

- ・ 商工会議所と推進協議会では、工場の所有者のネットワークづくりに向けて、ノコギリ屋根工場全件の実態把握に乗り出そうと、内閣官房都市再生本部により実施されている「全国都市再生モデル調査」に応募し、採択されました。全件調査では、市内の工業高校にも協力してもらい、実測調査を行っています。

- ・この調査を通じて、市内には237棟のノコギリ屋根工場が現存していることが確認され、また、所有者の8割が工場を残していきたいと考えていることも明らかになりました。

>>国や各自自治体が主催するモデル調査等を利用して調査を行うことは、独自に調査を行うことが難しい場合にも、いいきっかけになりますし、あるいは、高校や大学等の協力を得て行うことも、専門的な観点からの調査も可能となり、活動を進めていくのに有効でしょう。また、このような調査では、調査費用が補助されるものもあり、資金的に課題がある場合にも有効です。

>>調査結果が広く公表されることで、自分たちの活動を広く内外にアピールする機会にもなります。

●それぞれの得意分野を活かして活動する

- ・ノコギリ屋根工場の再生活用の取り組みにおいて、商工会議所とファッションタウン桐生推進協議会は、調査の実施やシンポジウムの開催などのPR活動を中心とした取り組みを、所有者・借り手を中心とした市民は、アトリエ等への再生活用などの実践的な取り組みを、行政は近代化遺産としての保存の取り組みなど、それぞれの得意分野で活動を続けています。

>>商工会議所、市民、行政等には、それぞれの役割・立場で得意とする活動内容があり、それを着実に進めていくことも、景観まちづくりを進めていくのに必要なことです。そして、これらが連携して進めていくことが、活動がさらに発展していくためには大切です。

原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●「わがまち風景賞」によるまちの魅力の発見

- ・「わがまち風景賞」は、市内の良質な風景を創出しているものを市民から募集、表彰し、まちなみ保存と活用や、市民の都市風景に対する意識を高めることを目的として、商工会議所により実施されています。応募作品のなかには、ノコギリ屋根工場の写真も多く見られ、市民が改めて意識することがなくても、ノコギリ屋根工場のある風景を美しいもの、特徴あるものと捉えていることがわかりました。
- ・ここでノコギリ屋根工場を写した写真が多かったことは、推進協議会において、ノコギリ屋根工場の再生活用にスポットを当てるきっかけの一つにもなっています。
- ・また、作品のなかには、商工会議所の人も知らなかったようなものや風景を被写体としているものもあり、それらは、まちの新たな魅力の発見にもつながっています。

>>市民が、自分の住むまちの写真や絵画に応募する機会を設けることは、自分たちのまちがどんなところであるのか、どんなものが特徴としてあげられるのか、何が魅力なのかなど、まちをよく見たり考えたりするきっかけになります。

●「お掃除探検プロジェクト」を通じて所有者とのつながりをつくる

- ・所有者とのネットワークをつくるためには、まず所有者との間につながりをつくる必要があります。そのための方策として考えられたのが「お掃除探検プロジェクト」でした。これは、長く使われていなかった工場の掃除をしようというイベントで、「桐生再演」で使用した工場を、美大生らが掃除し、メンテナンスを行っていたことにヒントを得ています。

- ・ 工場の所有者と、「桐生再演」にも携わっている学生や行政、市民などさまざまな年齢や立場の人たちが協力して掃除に取り組むことで、参加した人は外から見るだけだった工場に身近に触れることができ、また、所有者は工場がきれいになることで、まだ使えるのではないかと、価値があるのではないかと、工場を見直すことにつながっています。

>>会議形式だと人が集まりにくい場合には、イベントのようにしてきっかけをつくるのは有効です。市民が気軽に参加できる状況・仕組みをつくるのが、活動が広がっていくためには必要です。

>>長年放置されるなどして価値を見出せていないときでも、整備されることで、そのものの存在を見直すことにつながっていくことが期待できます。

●市民によるノコギリ屋根工場の再生活用

- ・ 調査活動が進められている一方、桐生のまちなかには、民間（市民）が手がけた活用事例がいくつも見られます。美容院や飲食店、アーティストのアトリエに転用されるなど、生まれ変わった工場の姿は、市民に工場の新しい可能性を示しています。
- ・ なかには、ノコギリ屋根型の建物が新築されたり、屋根にノコギリの模様が入った建物が建てられたりと、広く市民にも、地域の顔としてノコギリ屋根が認識されてきていることがうかがえます。



工場を再生活用したアトリエ

>>まちなかに、実際に再生活用した事例、成功事例があると、他の市民もイメージしやすくなり、関心を高めるためにも有効です。

●再生活用された工場の登録有形文化財への登録

- ・ 都市再生モデル調査後、5件のノコギリ屋根工場が国の登録有形文化財に登録されました。登録有形文化財は、外観のみの保存を対象としており、指定された工場は、アトリエや美容院など、新たな用途で活用がなされているものも含まれています。

>>法や条例による文化財等の指定がなされることで、関心の薄かった市民にも、広くわかりやすく価値があるものだとアピールすることができます。

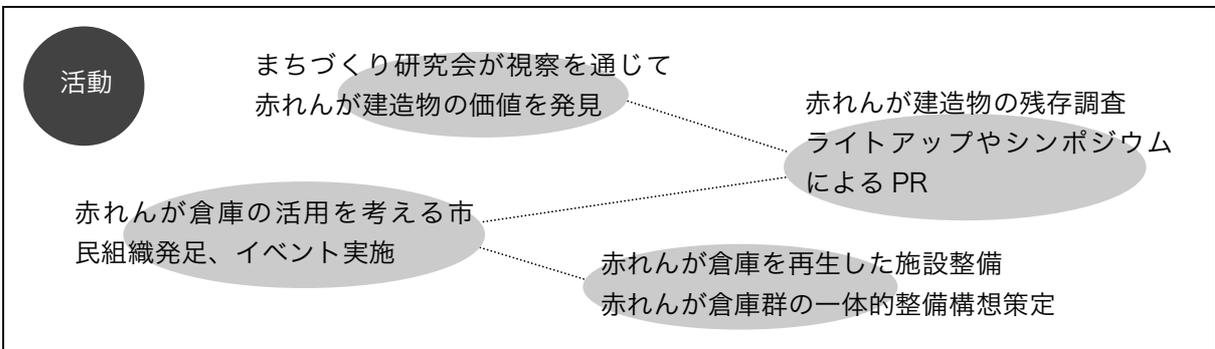
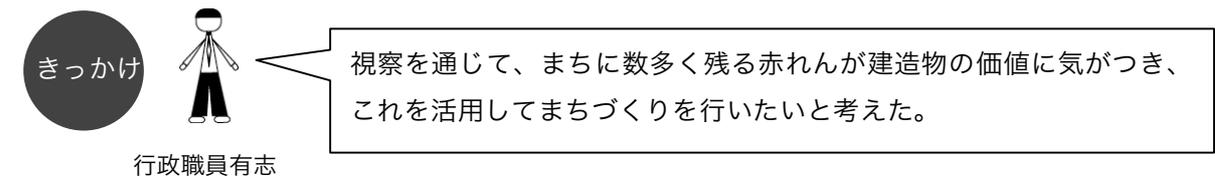
>>法や条例による保護にも、許可制度等の強い規制のかかるものから、指導・助言を基本とする緩やかなものまで、幅広く用意されています。対象となるものに適した制度を選ぶことが大切です。



個性的なまちづくりに向けた研究を開始した市職員有志。手がかりを求めて訪れた横浜市で、赤れんが倉庫活用の取り組みを知りました。

実は、東舞鶴は軍港として発展した歴史から、多くの赤れんが建造物が残っていました。日常的すぎてその価値に気がつかなかったメンバーは、まちづくりの手がかりを発見しました。

これ以降、赤れんが建造物の保存・再生によるまちづくりが開始されました。住民の関心を集めるためのイベントも開催されています。



- 効果**
- 赤れんが建造物を活かしたまちづくりについて考える市民組織が生まれる
 - 赤れんが倉庫を再生した施設整備が進む
 - 住民の間で、地域資源としての赤れんが建造物の認識が芽生え、自主的な赤れんが使用の取り組みがうまれる

住民グループ	住民	行政職員有志	行政
<ul style="list-style-type: none"> ○ 赤れんが倉庫を活用したイベントの開催 ○ 赤れんが建造物の活用を考える市民組織（赤煉瓦倶楽部・舞鶴）設立 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自宅の建設等で自主的に赤れんがを使用 ○ 赤れんがを意識した土産の制作や建物のネーミング 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自主研究会を通じて赤れんが建造物の価値を発見 ○ 残存調査やシンポジウムを通じて赤れんが建造物のPR 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 赤れんが建造物を再生した施設整備（赤れんが博物館、市政記念館、まいづる智恵蔵） ○ 赤れんが倉庫群の一体的整備構想の策定 ○ 国が、赤れんが倉庫群を重要文化財に指定

1989

横浜に視察に行こう!

舞鶴まちづくり推進調査研究会
分科会
都市の個性化

赤れんが倉庫を活かそうと計画しています

そういえば舞鶴にも赤れんが倉庫あるな...



赤れんが倉庫の活用いいんじゃないかな!!

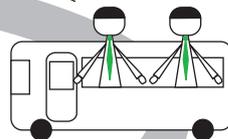
可能性あるかも!!

市の若手職員有志からなる「舞鶴まちづくり推進調査研究会」のメンバーは、個性的なまちづくりの手がかりを探して、横浜に視察に行きます。

in 横浜

赤れんが倉庫は価値があるんです! 協力して!

手始めにライトアップだ!



視察に訪れると、横浜市職員による「まちづくり研究会」のメンバーから、赤れんが倉庫を活用したまちづくりの取り組みを紹介されました。舞鶴にも多くの赤れんが倉庫が残されていることから、その活用に可能性を感じます。

きれいだね

いいですね



赤れんが倉庫をライトアップ

研究会では、赤れんが倉庫のPRに取り組みます。手始めに、様々な人の協力を得ながら、赤れんが倉庫のライトアップを行いました。その美しさから市民の注目を集めます。

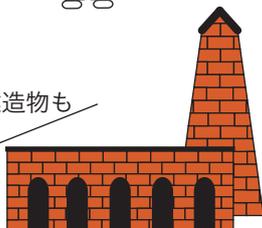
1994

他の赤れんが建造物も調査だ!!

まいづる建築探偵団

研究会のメンバーは、「まいづる建築探偵団」を結成し、赤れんが建造物の調査を始めます。

あの窯は! 珍しい!!

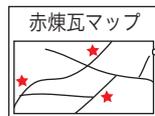


全国で5例目
ホフマン式輪窯
発見!

調査の結果、倉庫やトンネル、砲台、橋梁など120ほどの赤れんが建造物が確認されました。マスコミで報道されたことで、市民の関心も高まりました。

赤れんが建造物の活用方策を探りたい

マップ作ったよ 見て歩いて!!

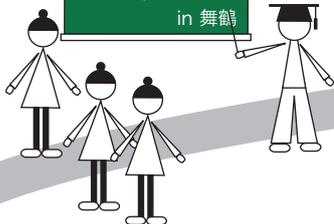


近所にある赤れんが建造物 価値あるんだね

新聞見たよ すごいね

全国の赤れんがにゆかりのある都市と交流を深め、赤れんが建造物の活用方策を探っていこうと、横浜と共催で「赤煉瓦シンポジウム」を開催します。

赤煉瓦シンポジウム in 舞鶴



よし! これていこう

赤れんがのまちづくり宣言

シンポジウムの反響の多さに、市長が赤れんがを活かしたまちづくりをしていくことを宣言します。

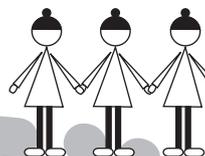
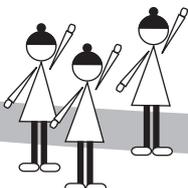
1991

私たちが検討に参加できる場が欲しい!!

まいづる建築探偵団

一緒にやりませんか?

やります!

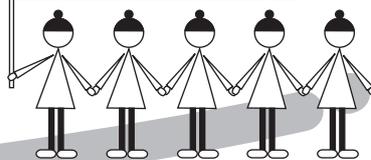


シンポジウムをきっかけに、「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が設立され、市の職員と市民と一緒に活動していくようになります。

1981

赤れんがを活用してまちづくりをしている、全国の団体との交流の場をつくろうと、「赤煉瓦ネットワーク」が結成されました。

赤煉瓦ネットワーク



「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は赤れんが建造物の存在と魅力を全国に広めようと、ジャズフェスティバルを開催します。



1993

赤れんが倉庫を再生しよう!



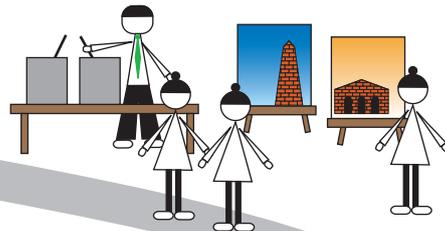
赤れんがのまちを全国に発信しよう!



市では、赤れんがのまちを全国に発信するイベントにも取り組んでおり、全国からクラフトマンが集まっています。

赤れんがフェスタ

グルメコーナー アートクラフトコーナー

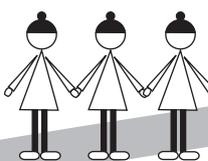


NPO 法人化しよう!!

2000



赤煉瓦倶楽部 舞鶴



「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は、まちづくりの政策提案にも取り組もうと、NPO 法人になります。

赤れんがの道復活だ!



赤煉瓦倶楽部



みんなで掘り起こそう!



赤れんがロード

中高生が中心となり、地元企業や多くの市民が参加し、赤れんがが敷設された道を発掘し、「赤れんがロード」として再生されました。

家でも赤れんが使ってみよう

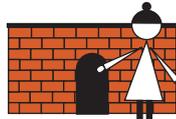


赤れんがが認識されていくにつれて、個人の住宅や派出所、地下道などいろいろなところで赤れんがが使われるようになります。

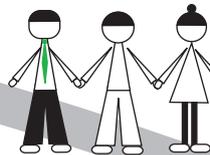


赤れんが倉庫寄付します

2004



展示施設として整備します!!



保存活用研究会

まいづる智恵蔵

民間企業が所有していた赤れんが倉庫が市に無償譲渡され、文化財展示施設として整備されました。

赤れんがアートスクール



赤れんがアートスクール構想

赤れんが倉庫群と水辺空間の一体的な整備・活用を目指し「赤れんがアートスクール構想」が策定されました。

これからは…



市では、子どもたちにもまちづくりに関心を持ってもらおうと、舞鶴の風景を描いた子どもたちの絵の展示会を開催しています。

重要文化財

赤れんが倉庫 7 棟が調査の結果、国の重要文化財に指定されることが決まりました。

□景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

原則1《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

●視察を通じた赤れんが倉庫の価値の発見

- ・舞鶴の景観まちづくりは、地域に数多く残る赤れんが倉庫や赤れんが建造物を活用して進みました。しかし、市職員有志がまちづくりのための勉強会を始めた当時、舞鶴の人々には、赤れんが倉庫がまちづくりの手がかりになるという認識はありませんでした。「観光拠点形成に関する調査」[昭和59年（1984）]などで活用が提案されたことがありましたが、軍の施設であったことから、あまり良いイメージを持たれていませんでした。
- ・そのような状況の中、まちづくりの先進都市である横浜への視察において、赤れんが倉庫を活かしたまちづくりの取り組みを知ったことで、その価値に気がつくこととなりました。

>>普段見慣れている地域の景観の価値には、気づきにくいものです。他の都市を訪れたり、他の都市の人々にまちを視察してもらったりすることで、地域の特徴や地域資源の発見のきっかけになります。

●市史の研究を通じた赤れんが倉庫の価値の啓発

- ・赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志は、その価値のPRに取り組みました。地域の人々や関係者の協力を得るための方法として取り組んだのが、舞鶴市史の研究でした。地域の歴史や赤れんが倉庫の歴史をひも解き、それを元に説明を行うことで、賛同者を得ることに成功しました。
- ・その後も、赤れんが倉庫の保存・活用と共に、学識経験者や文化庁等の協力を得ながら、学術的な調査・研究が進められました。そして、平成20年（2008）に、赤れんが倉庫群にある7棟の歴史的価値が評価され、国の重要文化財に指定されることが決定しました（指定名称は「舞鶴旧鎮守府倉庫施設」）。指定が決定した7棟の中には、「赤れんが博物館」や「舞鶴市政記念館」、「まいづる智恵蔵」が含まれています。

>>景観まちづくりの方向性を考える上で、歴史に手がかりを求めることは、最も確実な方法の一つです。



↑赤れんが博物館（左）、市政記念館（中）、まいづる智恵蔵の内部（右）

●赤れんが倉庫群を核としたまちづくり

- ・「赤れんが博物館」の整備[平成5年（1993）]以降、周辺での施設整備が進みました。市役所に隣接する赤れんが倉庫は、「舞鶴市政記念館」として改修されました[平成6年（1994）]。また、赤れんが倉庫群の一角にあった赤れんがが敷設された道が、中高生を中心に掘り起こし作業が行われ「赤れんがロード」として整備されました[平成15年（2003）]。平成16年（2004）には、「舞鶴市政記念館」に隣接する、民間企業が所有する赤れんが倉庫が市に無償譲渡され、市の文化財の

展示スペースや、交流スペース、研究スペース等を持つ施設「まいづる智恵蔵」として整備が進められました [平成19年 (2007) に開館]。

- ・平成18年 (2006) からは、赤れんが倉庫群の一体的な整備を目指し、保存・活用方策の検討が進められ、「赤れんがアートスクール構想」としてまとめられました [平成20年 (2008)]。この中では、赤れんが倉庫群と水辺空間との一体的な空間整備イメージや、赤れんが倉庫の活用方策等が提案されています。今後、この構想を元に、整備が進められる予定になっています。

>>歴史的建造物を活かした景観まちづくりにおいては、建物本体のみでなく、周辺地区も併せて整備に取り組むことで、その価値が高められていきます。



←赤れんが倉庫群の空間整備イメージ
(出典：舞鶴市赤れんが倉庫群保存活用検討委員会
『舞鶴赤れんがアートスクール構想』)

原則 2 《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●市職員有志の自主的な取り組みが導いた、行政による赤れんが倉庫活用の取り組み

- ・舞鶴の景観まちづくりの気運が高まった背景には、市職員有志による、自主的な取り組みの成果がありました。横浜市への視察を通じて赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志は、赤れんが倉庫のライトアップや、赤れんが建造物の残存調査等の活動に自主的に取り組みました。さらに、全国の赤れんがにゆかりのある都市の人々と、舞鶴市民約140名の参加を得て、「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」を開催しました [平成2年 (1990)]。このシンポジウムでの参加者の反響の高さに、それまでは赤れんが倉庫の活用に積極的ではなかった市長が、今後、赤れんが倉庫を活かしたまちづくりにとりくむことを宣言しました。これがきっかけとなって、その後の活動へと発展していきました。

>>無理のない範囲で、各自がやれることに取り組んでいくことが、地域の人々の景観まちづくりに対する意識の啓発へと繋がります。

●住民によるまちづくり組織の設立と、他都市とのネットワークの形成

- ・「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」をきっかけに、市民の間で景観まちづくりの気運が高まったことに応えて、住民を中心とした組織である「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が設立されました [平成3年 (1991)]。これにより、それまでは市職員有志が中心となっていた活動の幅が広がっていきました。
- ・また、「赤煉瓦シンポジウムin舞鶴」の中で、全国の赤れんがにゆかりのある都市の間で、交流と情報交換の場を設立しようという動きが起こり、それが実現される形で、全国5市から7団体が参加して「赤煉瓦ネットワーク」が結成されました [平成3年 (1991)]。これ以降、全国の都市との連携を図りながら、景観まちづくりが進んでいくこととなりました。

>>行政職員は様々な情報や補助金活用等のノウハウを持っていますし、住民は職業や趣味に応じた特技を持っています。多くの人々の力を結集することで、多様な展開が可能となります。

>>他の都市と連携や交流を図ることで、活動推進のための情報交換や、ノウハウの獲得を行うことができます。

●市民や行政による、建物の建設における自主的な赤れんが使用

- ・ 赤れんがに対する認識が高まっていく中で、個人の住宅建設や行政の施設整備においても、自主的に赤れんがを使用する動きが起り始めました。庁舎や派出所、国道の横断地下道、トンネルの坑口、自衛隊施設の塀などで使用され、まち全体に赤れんがの存在が浸透していきました。

>>様々な人々が可能な範囲で協力することが、まち全体での景観形成に繋がります。

●多様な活動展開を目指したNPO法人の設立

- ・ 「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」は、様々な活動に取り組む中で、地域の中でより認知された団体となり、まちづくりに関する提言を行うことや、運営経費の捻出等を目的に、NPO法人格を取得しました[平成12年(2000)]。これをきっかけとして、「赤れんがフェスタ」の企画の一部を受託・運営するなど、新たな活動に取り組み、実績を積み重ねていきました。そして、平成18年(2006)からは「舞鶴市政記念館」の、平成19年(2007)からは「まいづる智恵蔵」の指定管理者となり、施設の管理運営に取り組んでいます。

>>活動の目的や内容に応じて組織形態を工夫することで、幅広い取り組みが可能になります。

原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●ライトアップやシンポジウム等のイベントを通じた赤れんが倉庫のPR

- ・ 赤れんが倉庫の価値に気づいた市職員有志が、PRのために取り組んだのがライトアップでした。その美しさによって人々の注目を集めることとなり、また、新聞で報道されたこともあり、地域内で、赤れんが倉庫に対する認識が広まることとなりました。
- ・ 「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」では、赤れんが倉庫の存在と魅力を地区内外に広めるために、「赤煉瓦サマー・ジャズ・イン舞鶴」を開催しました[平成3年(1991)より]。著名な演奏家を招待したことでジャズの専門誌でも取り上げられ、全国から聴衆を集めることに成功しました。この様子がマスコミで取り上げられたことで、舞鶴の赤れんが倉庫の存在が、広く知られることとなりました。
- ・ 市でも、「赤れんが博物館」の開館以降、赤れんがのまちを全国に発信するためのイベント「赤れんがフェスタ」にも取り組みました[平成5年(1993)より]。赤れんが倉庫群を活用して、舞鶴が発祥と言われる肉じゃが料理や海軍料理を提供するグルメコーナーや、れんがを用いたアート展などが行われています。

>>様々な人が気軽に参加できるイベントを通じて、地域の景観資源に実際に足を運んで賞うことで、地域の人々の認識が高まることとなります。また、イベントの様子がマスコミによって報道されることで、景観まちづくりの取り組みを、広く発信することができます。



↑赤れんが倉庫に囲まれ、様々なイベントの会場となる、通称「三面煉瓦」。



↑赤れんがフェスティバルの様子。赤れんが倉庫内や周辺の空間を利用して様々なイベントが開催されている。

●赤れんがをテーマとした博物館の開館

- ・ 赤れんが建造物を活かしたまちづくりの気運が高まる中、市制50周年記念事業の一環として、赤れんが倉庫が改修され、「赤れんが博物館」として整備されました [平成5年(1993)]。現役の倉庫として使用されているものも多く、内部を見学できる赤れんが倉庫がなかった状況で、このような施設が整備されたことで、まちづくりのシンボルとなる建物が誕生することになりました。
- ・ 当初、「赤れんが」というテーマに対する不安や反対もありました。しかし、世界39カ国のれんがの収集・展示や、れんがに施された刻印や浮き彫りを切り口とした文明や近代化の紹介、日本各地のれんがやれんが建造物の紹介といった、展示内容の工夫により、年間6～7万人が訪れる博物館となっています。

>>地域のシンボルとなるような施設が整備され、多くの人々が訪れることで、景観まちづくりに対する関心が高まることとなります。

>>地域をテーマとした博物館等の設置・運営に当たっては、展示内容を工夫することで、多くの来館者が訪れる魅力的な施設が生まれます。

●子どもを対象としたまちづくりへの意識啓発

- ・ 赤れんが倉庫を活かしたまちづくりが進む中、子どもたちを対象として、まちづくりに関心をもってもらおうという取り組みも行われています。
- ・ 平成15年(2003)に、赤れんがが敷設された道の掘り起こし作業が行われ、「赤れんがロード」として整備されました。この作業は、中高生を中心に地元の企業や多くの市民が参加し、発掘作業を実施、また、子どもたちが、日干しれんが作りに挑戦するなど、遊びの要素も取り入れながら、子どもたちを巻き込んで活動が行われました。
- ・ また、地域の小学校と連携し、文化財の中で、地域の歴史や風景を学ぶ教育を実施、赤れんが倉庫群内での写生や子どもの思いを伝えるメッセージ展を開催しました。

>>景観まちづくりの継続においては、子どもに対する啓発も大切です。子どもの頃から地域の様々な景観に触れることが、深い地域理解や地域への愛着に繋がり、景観まちづくりに取り組む姿勢を育みます。

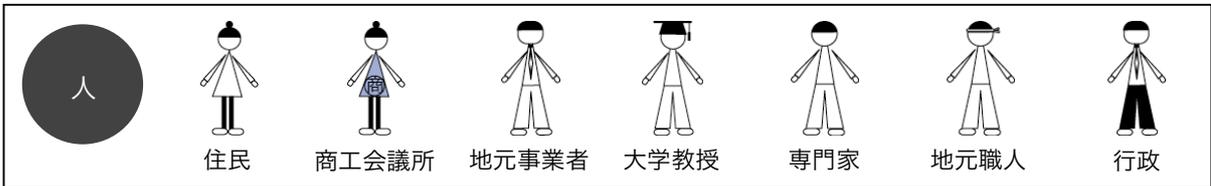


↑赤れんがロードの整備の様子(左)と 整備された赤れんがロード(右)

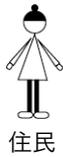


戦前は地域の産業を支え、賑わいをみせた堀川運河でしたが、戦後になると水質汚濁による悪臭が問題となり、埋め立てが決定されました。これに対して、愛着ある運河を守ろうとする住民の反対運動によって、保存が決定しました。

ところが、保存に向けて開始されたのは埋出しによるコンクリート護岸工事。歴史的価値を訴える有識者の働きかけにより、文化財保存を目指した修景工事に切り替えられました。これに触発された住民による歴史的建造物保存も行われています。

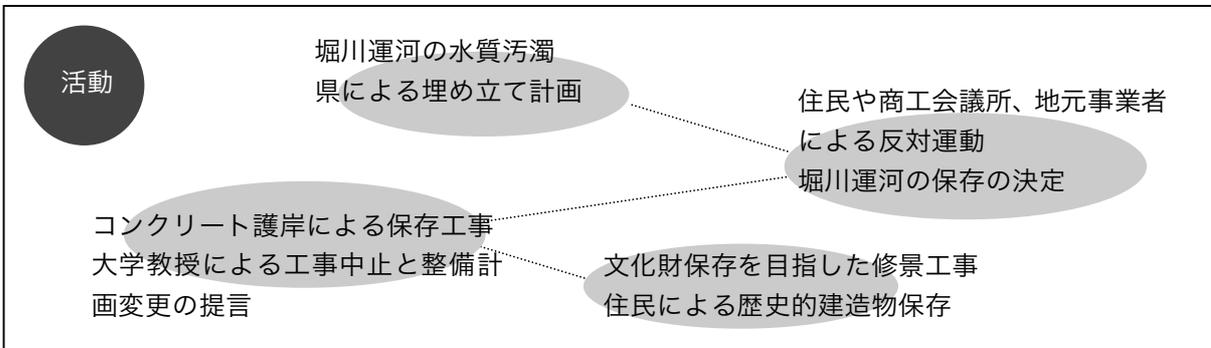


きっかけ



住民

堀川運河の埋め立て計画に対して、愛着ある堀川運河を守り、地域資源として活用したいと考え、保存を訴えた。



効果

- 歴史的な価値のある堀川運河が保存される
- 堀川運河周辺の修景が進み、快適な水辺空間が生まれ出される
- 住民により、堀川運河周辺の歴史的建造物保存の取り組みがおこる

住民・商工会議所等	大学教授	専門家	行政
<ul style="list-style-type: none"> ○イベント開催や郷土誌編纂などによる運河の保存運動（住民、商工会議所、地元事業者） ○運河周辺の歴史的建造物保存（住民） 	<ul style="list-style-type: none"> ○コンクリート護岸の中止と文化財保存修景事業への切り替えの提言 ○行政、住民、専門家の統括による景観まちづくりの牽引 	<ul style="list-style-type: none"> ○緻密な調査による修景計画策定（専門家） ○地場産材を用いた復元工事（地元職人） ○質の高い景観デザインによる空間整備（専門家） 	<ul style="list-style-type: none"> ○コンクリート護岸工事中止の英断（県） ○運河の修景と周辺のまちづくりの一体的な検討（県・市）

1970~

運河臭うなあ…

それなら埋め立てよう

でも観光資源になるのでは？保存して！

1988

運河保存のために私たちが何かしよう！

堀川運河は、水質の悪化が問題となっていました。そのため埋立計画が検討され、一旦は埋立が承認されます。

運河を観光資源として活用しようという気運が高まり、住民による「油津堀川運河を考える会」が結成されます。

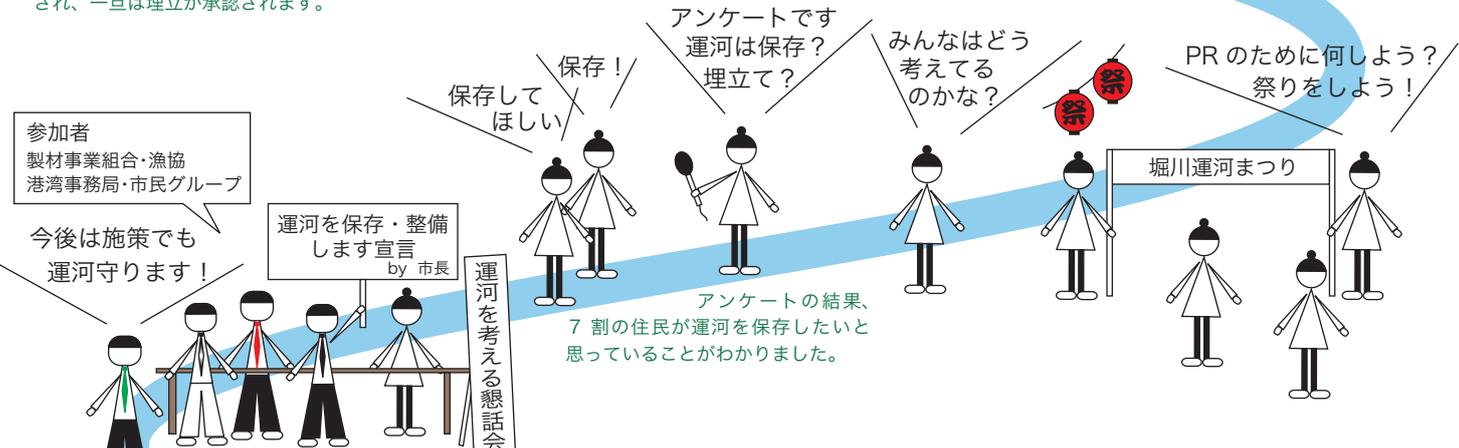


参加者
製材事業組合・漁協
港湾事務局・市民グループ

今後は施策でも運河守ります！

運河を保存・整備します宣言
by 市長

運河を考える懇話会



日南市産業活性化協議会は、異業種交流を目的に設立されました。運河再生の盛り上がりを受けて、油津地区の再生に取り組みます。

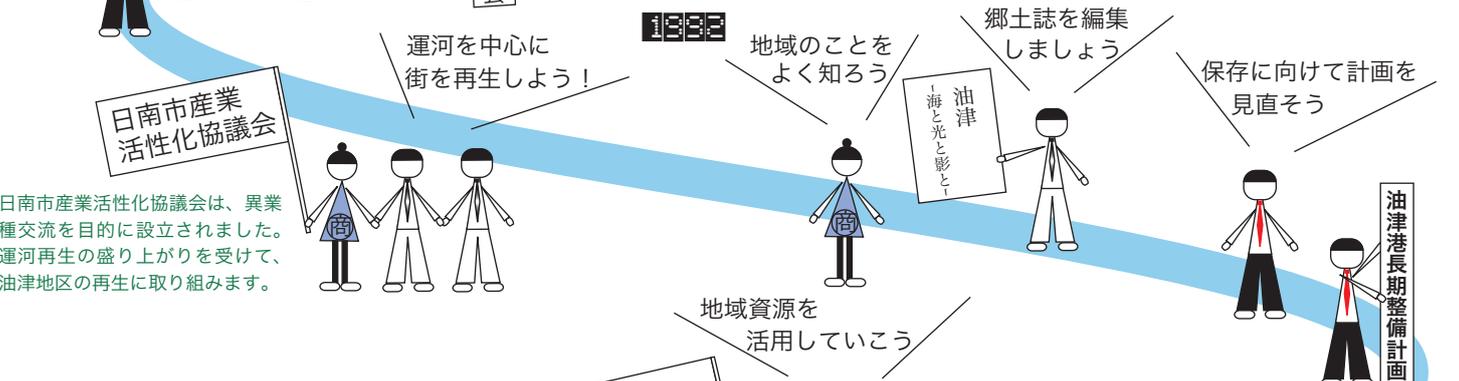
運河を中心に街を再生しよう！

1993

地域のことをよく知ろう

郷土誌を編集しましょう

保存に向けて計画を見直そう



コンクリートで覆われ石を貼った運河…これでいいの？

コンクリートで補強された護岸を見た専門家により、工事の中止と計画の変更が提言されます。

油津みなと街づくり委員会

商店街と市民組織でも委員会を立ち上げ、地域資源を活用した街づくりを目指します。

1995



2001

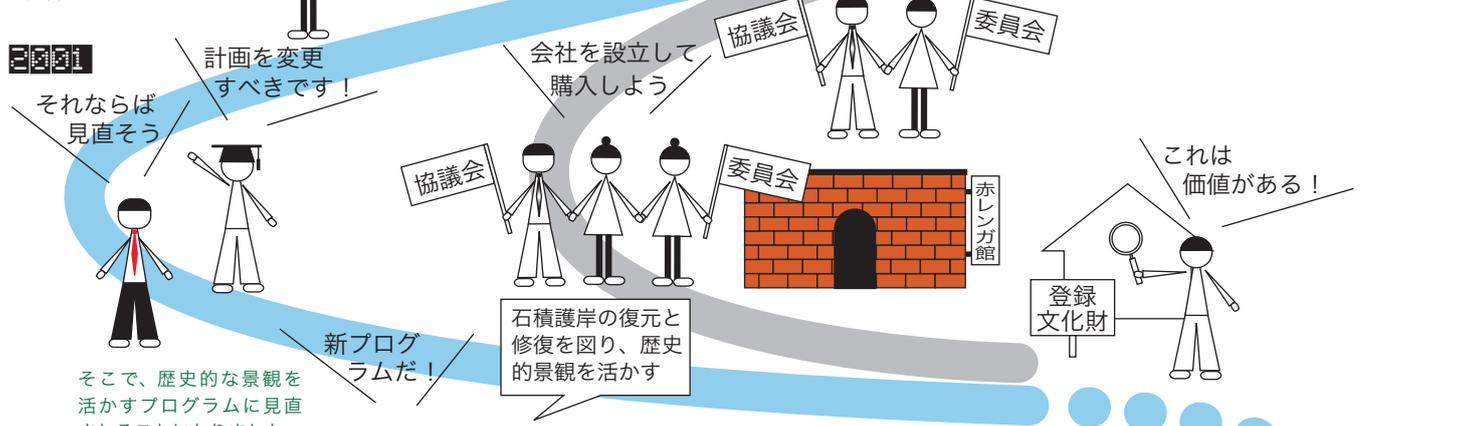
計画を変更すべきです！

それならば見直そう

会社を設立して購入しよう

協議会

委員会



そこで、歴史的な景観を活かすプログラムに見直されることになりました。

石積護岸の復元と修復を図り、歴史的景観を活かす

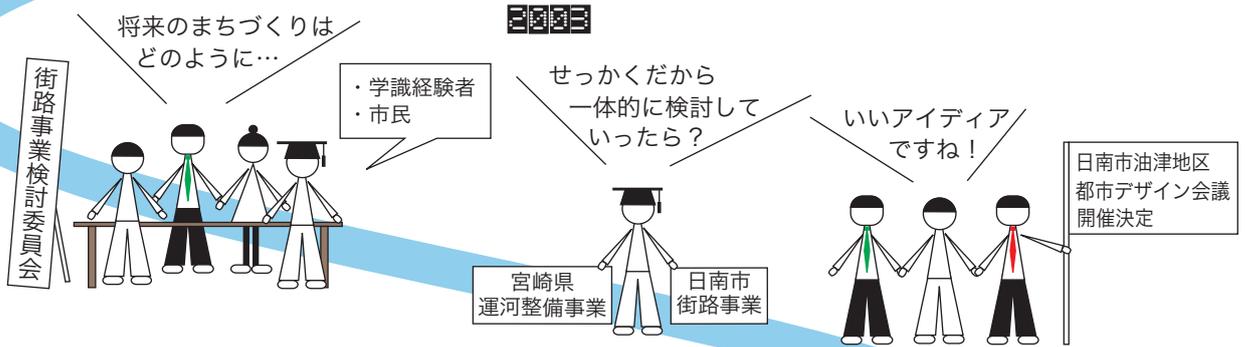
新プログラムだ！

石積護岸の修復と修景プログラム

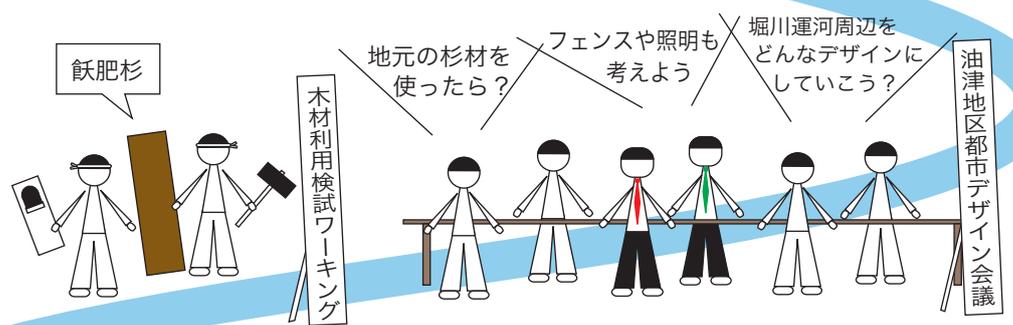




石積護岸の修復に併せて、県では堀川運河周辺の整備計画の検討が進められます。

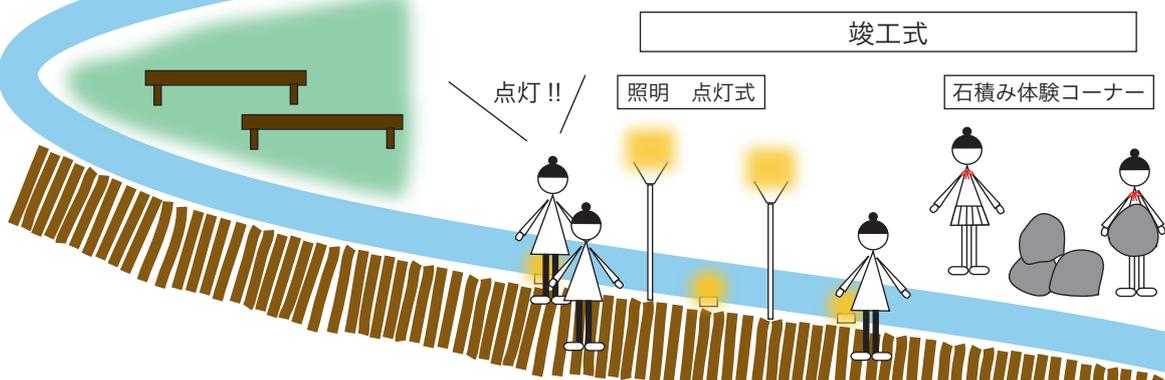


市では、街路事業調査を開始し、堀川運河周辺の将来まちづくり構想を策定していきました。



地元森林組合や大工の協力を得ながら、地場産材である杉の使用が検討されました。そして、ボードデッキや木橋などで積極的に使われます。

運河整備事業と街路事業を統合して「日南市油津地区都市デザイン会議」が設立されます。これ以降、事業主体にとらわれることなく、行政と専門家、市民が一体となった検討が進められるようになります。



竣工式では、子どもたちによる石積み護岸体験や、照明の点灯式が行われました。



市では、景観に対する市民の関心が高まったことも受けて、景観行政団体になり、次いで「日南市美しいまちづくり景観基本条例」を制定しています。

「赤レンガ館」が市に寄贈されることになりました。「歴史を生かしたまちづくり」計画の中心となる建物として、市では活用方策と保存修理計画の策定に取り組んでいます。

堀川運河が、運河関連で全国初の登録文化財となります。同時に、運河に架かる橋と取水口の石堰堤も登録されました。

□景観まちづくりの3原則からみた成功のポイント□

原則1 《地域性》 歴史・文化・産業・意匠・構法・素材などの地域資源の再発見

●郷土誌の編纂や、まちづくりの調査を踏まえた堀川運河の評価

- ・市民の間で堀川運河の保存運動が盛り上がる中、日南市産業活性化協議会（通称NIC21）[昭和62年（1987）から]でも、堀川運河を中心とする油津地区の再生に取り組み始めました。そして、地域の歴史や産業、生活、環境、文化などの関係性を踏まえて堀川運河を総合的に理解することが必要であるという考えから、郷土誌の編纂に取り組みました。歴史資料の収集や、地域のお年寄りへの聞き取り、アンケート調査などを行い、さらに、まちづくりの提言をまとめ、『油津—海と光と風と—』を出版[平成5年（1993）]しました。
- ・さらに、商店街や市民グループに呼びかけを行い、「油津みなと街づくり委員会」を設立[平成7年（1995）]し、地域資源を活用したまちづくりの調査などに取り組みました。そして、その成果をまとめた報告書『蘇れ油津：港と運河のまちづくり計画策定事業』[平成7年（1995）]をまとめました。これらの郷土誌や報告書は、その後のまちづくりの、重要な手がかりとなりました。
- ・その後、油津のまちなみや堀川運河周辺の建築物や土木工作物について、文化庁登録有形文化財に申請して[平成10年（1998）、平成16年（2004）、平成18年（2006）]、21件が登録されました。油津の歴史的資源を内外にPRする上で、大きな効果がありました。

>>地域の歴史や文化などを見直してみることで、景観まちづくりの目指すべき方向性が見えてきます。

●材料・工法に忠実にこだわった運河の修復・復元

- ・学識経験者の提言を受けて、宮崎県では、堀川運河の歴史的価値を活かした保存・再生に取り組みました。県の公文書センターに保管されていた記録から、大正から昭和にかけての工事内容を明らかにすると共に、石積護岸の実測に取り組みました。これを踏まえて、地元の石工の協力を得ながら、伝統工法にこだわった修復・復元を行いました。また、使用する石材も、元々の石積護岸とほぼ同質の石材（長崎県諫早地方の砂岩）を探し出して使用しました。これにより、往時の景観を取り戻すことに成功しました。

>>建造物等の修復や再生では、可能な限り、元々の材料や工法を忠実に再現することで、場所にあった景観が生まれます。

●地場産材を活用した堀川運河の水辺のデザイン

- ・堀川運河の石積護岸の修復・復元と併せて行われた周辺の水辺空間の整備では、地場産材である飫肥杉が使用されました。耐久性が乏しい杉材の使用に対して、メンテナンスまで考慮して使用方法を検討したことで、ボードデッキやベンチなどでの使用を実現しました。また、飫肥石は小舗石として用いられています。地元には、飫肥石を小舗石（ピンコロ）として使用する文化はありませんでしたが、その材質を考慮した上で、使用が決定されました。

>>景観まちづくりにおいて、地場産材を使用することは、地場産業の活性化に繋がります。

原則2 《推進体制》 早期からの適切な行政・市民・専門家のコラボレーション

●市民団体、商工会議所・商店街による地域資源活用の取り組み

- ・市民の間で、堀川運河の観光資源としての価値が再認識され始めた頃、市民により「堀川運河を考える会」が設立 [昭和63年 (1988)] され、アンケートや「堀川運河まつり」の開催などを通じて、堀川運河のPRに取り組みました。このPRが奏功し、堀川運河保存の気運が盛り上がる中、日南市は、製材関係者や漁業関係者、港湾事務所、市民グループなどと「観光懇話会」を開催し、保存の是非を考えました。そして、市長が保存・整備の意向を示したことから、市の政策が、運河保存へと変更されることとなりました。

>>様々な人々が、各々の立場から考えを表明し、検討することが、景観まちづくりを適切な方向へ導きます。

●専門家の提言を踏まえた、県による工事中止と整備方針の変更

- ・市民による保存運動と日南市の方針変更を受けて、宮崎県により、堀川運河の整備工事が開始されました [平成5年 (1993)]。しかし、この工事は、堀川運河の歴史的価値を活かしたのではなく、石積護岸の前面にコンクリート護岸を設置し、遊歩道を整備しようという内容でした。
- ・この状況を視察した篠原修東京大学教授 (当時) によって、工事中止と整備計画の変更が提言されました。これを受けて、宮崎県で事業の見直しを行った結果、石積護岸の修復による歴史的な景観の復元へと方針が変更されました。併せて、設計チームの再編が行われ、篠原修東京大学教授 (当時) の統括のもと、文化財修復の専門家、都市計画家、土木設計家、デザイナーによる、設計体制が作られました。

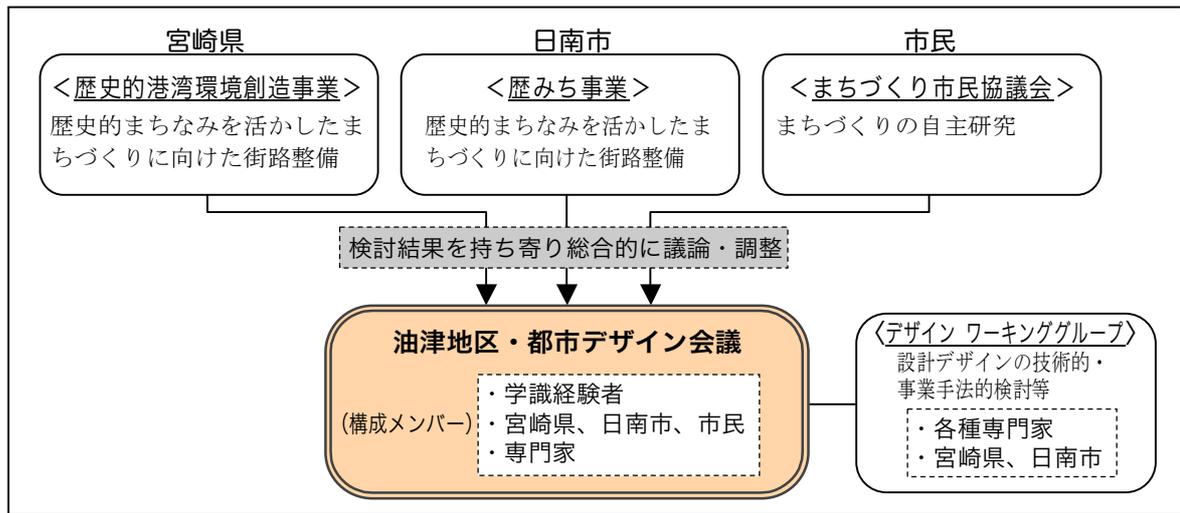
>>貴重な歴史資源は、一度壊してしまったら、二度と取り戻せません。事業の決定に際しては慎重を期することが大切ですし、必要に応じて計画の見直しや事業の中止を行う勇気と決断が求められることもあります。

●事業主体にとらわれない一体的な検討体制の確立

- ・宮崎県により堀川運河の整備が進められていたのと同時期に、日南市では、歴史的まちなみを活かしたまちづくりに向けた街路の整備を進めていました。この2つの事業は、共に、篠原修東京大学教授 (当時) が検討委員会の委員長を務めていたことから、両者を統合した合同会議として、県と市の共催により、「油津地区・都市デザイン会議」が設立 [平成15年 (2003)] されました。
- ・また、日南市の公募で集まった市民により設立された「まちづくり市民協議会」 [平成14年 (2002) から] は、まちづくりに関する自主研究会を行い、活動成果を都市デザイン会議で報告しました。
- ・これにより、県・市・市民・専門家による検討が行われるようになり、模型等を使いながら、計画や設計の検討が行われました。

>>関連する事業を一体的・総合的に検討できる体制を作り、整備に取り組むことが、質の高い景観を生み出します。

>>景観まちづくりにおいては、様々な立場の人々の意見を反映させることで、新たなアイデアや有効な解決策が生まれてきます。模型を使用するなど、みんなが分かりやすく議論できるように工夫することが大切です。



「油津地区・都市デザイン会議」の検討体制

●地元大工による、自主的な模型製作を通じた橋の工法の提案

- ・ 周辺整備の一環として行われた、「シンボル緑地」と呼ばれる緑地の整備では、木橋が新設されました。この設計段階において活躍したのが、「まちづくり市民協議会」のメンバーである、地元の大工さんでした。検討の過程で、木橋の模型を製作することを聞きつけたこの大工さんは、自ら模型製作を申し出て、全長約4mの5分の1スケールの木製の模型を製作しました。
- ・ これにより、工法や強度の確認が可能となりました。また、橋の屋根には、日南の伝統的な造船技術である「曲木」（材木を曲げて作った部材）の使用が検討されていましたが、当時は、橋に使うような大きなサイズの材木を曲げるための技術がありませんでした。そこで、この大工さんが自ら、木を曲げるための道具を制作しました。さらに、木橋の床板の固定方法についても、防水性に優れ、見た目にも優れた固定方法を提案しました。

>>住民は、職業や趣味に応じて、様々な知識や技能を持っています。中でも、大工などの、景観まちづくりに直接関係する職業の人々が、知識や経験を元に積極的な役割を果たすことが、地域に根ざした景観まちづくりの実現に繋がります。

>>市民の積極的な参加を得るためには、景観まちづくりに関する情報を公開することが大切です。

原則3 《実現性》 計画の実現のための資金や手法、運営等に対する細やかな配慮

●イベント開催等を通じた堀川運河の埋め立て反対運動

- ・ 堀川運河の保存と再生を望む市民によって設立された「堀川運河を考える会」では、運河のPRを目的に、昭和63年（1988）に「堀川運河まつり」を開催しました。音楽の愛好家によるグループと連携し、レンガ倉庫や空き地を利用して、ジャズライブやバザーなど、市民誰もが気軽に参加できるイベントを開催することで、市民が運河に関心を持つきっかけの一つになりました。

>>地域の人々が楽しんで参加できるイベントを開催することで、身近な景観資源への関心を高めることが出来ます。

●市民による、会社設立を通じた歴史的建造物保存

- ・平成8年に、日本ナショナルトラストによるまちなみ調査が行われ、堀川橋や河野家主屋など、5件の建造物が、国の登録文化財に登録されました。これによって、まちなみや、歴史的建造物に対する市民の関心が高まることとなりました。(平成19年度まで21件の登録文化財)
- ・その翌年に、大正時代に建造された赤レンガ倉庫の売却計画が起こると、「日南市産業活性化協議会」や「油津みなと街づくり委員会」のメンバーが中心となって、市民有志31人が会社を設立し、銀行からの融資を受けながら赤レンガ倉庫を購入し、「油津赤レンガ館」として保存を行いました。この建物は、翌年、文化庁の登録文化財に登録されました。
- ・銀行から借りた買収資金の完済を機に、「油津赤レンガ館」は市に寄贈され、市は、改修と活用に取り組んでいます。

>>歴史的建造物の保存においては、資金確保が課題となることもあります。適切な組織形態をとることで、融資や補助を受けることが出来るようになります。

●工事の完成式典による市民の啓発

- ・堀川運河の一部工事が竣工すると、宮崎県と日南市では、竣工式を開催しました。式典には多数の市民が参加し、子どもたちによる護岸の石積み体験や、照明の点灯式、和太鼓の披露などが行われました。この様子は、地元の新聞やテレビでも紹介され、堀川運河に対する市民の関心を集めることに繋がりました。
- ・屋根付き木橋孝治では、市民が「堀川運河に屋根付き橋をかくっかい実行委員会」を結成し〔平成19年(2007)〕、橋の名前募集や市内小中学生による部材へのメッセージ記入、上棟式や竣工式の開催などを行いました。

>>良好な景観を目にすることで、住民の関心は飛躍的に高まります。事業の途中段階や、完成時に、住民が参加できるイベントを開催することも、有効な方法の一つです。